

ウィハン弦楽四重奏団



～3つのジャンルにおける珠玉の名作を集めて～
(ピアノ協奏曲、弦楽四重奏曲、ピアノ五重奏曲)

Wihan Quartet with Katsushi Kanazawa

2026年10月28日(水) 小金井 宮地楽器ホール 大ホール

開演:午後7時15分(開場:午後6時30分)

PROGRAM

※プログラムは予告なく変更になる場合がございます。
あらかじめご了承ください。

(モーツァルト生誕270年)

① モーツァルト:ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K.414 (ピアノ五重奏版)
W.A.Mozart: Piano Concerto No.12 in A major K.414 (Piano Quintet Version)

② ヤナーチェク:弦楽四重奏曲 第1番「クロイツェル・ソナタ」
L.Janáček: String Quartet No.1, "Kreutzer Sonata"

③ スーク:チェコの古いコラル「聖ヴェンツェスラウス」による瞑想曲
Op.35a (弦楽四重奏版)
J.Suk: Meditation on the Old Czech Chorale "St. Wenceslas" Op.35a (String Quartet Version)

(ショスタコーヴィチ生誕120年)

④ ショスタコーヴィチ:ピアノ五重奏曲 作品57
D.Shostakovich: Piano Quintet Op.57



チケット取り扱い

5,500円

(全席自由・税込)

・JILAチケットセンター TEL&FAX 03 (3356) 4140

受付時間 11:00 ~ 18:00 (土日祝を除く)

・小金井 宮地楽器ホール2F事務所内チケットデスク

受付時間 10:00~19:00 (窓口のみ/現金のみ) 042(380)8077

【ネット予約】・チケットぴあ Pコード:328-236 ・カンフェティ チケットセンター

ネット予約をご希望の際は各チケットサイトの公演検索から「Pコード」「公演名」で検索の上、お申し込みください。

主催: 国際芸術連盟 www.jila.co.jp

〒160-0022 新宿区新宿2-15-2 岩本和哉ビル 2階
TEL:03 (3356) 4033 FAX:03 (3356) 5780

後援: 駐日チェコ共和国大使館

日本チェコ協会

(一般社団法人)

全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)

チェコセンター
東京

ウィハン弦楽四重奏団 Wihan Quartet

レオシュ・チェピツキー Leoš Čepický <1st.Violin>

ヤン・シュルマイスター Jan Schulmeister <2nd.Violin>

ヤクブ・チェピツキー Jakub Čepický <Viola>

ミハル・カニユカ Michal Kaňka <Cello>

※今回(2026年10月)の日本公演では、シュルマイスター氏が来日不能となり、リボール・カニユカ氏 Libor Kaňka <2nd.Violin> が代役を担う。



※2025年10月30日公演のゲネプロ風景

ウィハン弦楽四重奏団は「弦とアンサンブルの国」といわれるチェコを代表するクアルテットのひとつである。「ウィハン」の名は、チェコの歴史的な名楽団のボヘミア弦楽四重奏団の創設者で、チェリストでもある「ハヌシュ・ウィハン」の名を冠したものである。メンバーの4人がプラハ芸術アカデミーの学生であった1985年に結成された。結成3年後から世界の名だたるコンクールを次々と制覇、とりわけ1988年の「プラハの春・国際コンクール」に優勝した際には、世界的ヴァイオリニストのY・メニューインからのお墨付きも頂き、以降、全世界を股にかけ、結成以来40年以上にわたり、大活躍を続けている。

この楽団の特徴は何といってもメンバーが固定されていることである。2014年にヴィオラのヤクブ・チェピツキー、2018年にチェロのミハル・カニユカの両氏が、それぞれ創設時の奏者の後任として着任した。40年以上ものキャリアの中で人事異動はこれ2回のみ、ヴァイオリン奏者2人は結成当初から現在までその座を張り続けている。この驚くべき一貫性が彼らに対する多くの賛辞の対象となっており、ニューヨーク・タイムズ紙はこの楽団の「固定メンバーによって築かれた信頼関係によるアンサンブル」に注目している。現在のメンバーによる活動も9年目に入り、結成当時のメンバーの時よりもはるかに意欲的な活動を展開している。

レパートリーも実に幅広く、スメタナ、ヤナーチェク、ドヴォルザーク等のお国ものは言わずもがなで、古典派、ロマン派のこのジャンルの代表曲や現代曲にまで深い造詣を示しており、またレコーディングにも積極的で2008年のプラハにおいて、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲演奏会のライブCDとDVDがニンバス・アライアンスより上梓されたことが特筆され、「インターナショナル・レコード・レビュー」は彼らを「今日の世界最高の弦楽四重奏団のひとつ」と絶賛した。

またウィハン・クアルテットはロンドンを準本拠地として活躍しているが、当地、イギリスのBBCミュージックマガジン社からは「世界有数の室内楽団」との評価を勝ち取っており、本年(2026年)2月にもロンドンを中心にハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、そしてお国ものにもウェバーのクラリネット五重奏曲を加えた演目によるツアーを行った。

ウィハンのメンバー4人は全員相当な親日家であり、1995年の初来日以来、現在まで20回以上の訪日歴があり、昨年(2025年)10月にはわが国でも結成40周年の記念コンサートを行い、大成功を取めた。ここ数年は毎年10月の来日演奏会がほぼ定番化しており、本年(2026年)も再訪日が実現する。

しかし今回(2026年)は第2ヴァイオリンのシュルマイスター氏が来日不能になることが確定しており、リボール・カニユカ氏が代役として楽団の一員に加わることとなった。リボール氏はチェロのミハル・カニユカ氏の実兄で、ウィハンと同国、チェコのマルティヌー弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者として活躍しており、まさに室内楽はお手の物、という演奏家である。

さらにウィハンの第1ヴァイオリニスト、レオシュ・チェピツキー氏とは完全な同業者ということもあり、無二の盟友というのも追い風となって、急遽代役として加わっても、即座に響きに溶け込み、見事なアンサンブルを奏でってくれること、まちがいない。

今回の4人の構成を注視すると、舞台上で両端に配置される第1ヴァイオリンとヴィオラ奏者が親子、そして内側に座る第2ヴァイオリンとチェロ奏者が兄弟、このような団員構成の弦楽四重奏団は世界中見渡しても珍しいはずで、この事象は必ずや阿吽の呼吸によるアンサンブルに相当有利に作用し、これまで以上に熟達した美しい響きを奏で、わが国のファンの期待に違わぬ、すばらしい日本ツアーになること、必至であろう。

<https://wihanquartet.co.uk/>

金澤克史 Katsushi Kanazawa

武蔵野音楽大学を経て1984年同大学院修了。在学中にモーツァルティウム音楽大学に短期留学し、修了演奏会に出演。帰国直後の82年にNHK洋楽オーディションに合格し、FM「午後のリサイタル」に出演。また83年に東京文化会館、84年に日本演奏連盟のオーディションに相次いで合格、本格的に活動を始め、以来今日まで40年以上にわたって質実剛健的な活動を続けている。

ソロリサイタルは1987年に第1回を開き、これまでに12回を数える。またピアノ協奏曲は85年に東京交響楽団、86年に広島交響楽団、2回の共演実績があり、2回目の時の指揮者は小林研一郎で、演目はモーツァルトの「戴冠式」であった。

90年に入ってから邦人現代曲を積極的に手がけ、この集大成として2002年に「彩響」、04年に「彩響Ⅱ」の2枚のソロCDを上梓。わが国の代表的な本流に列する作曲家の傑作を網羅した20曲の録音であるが、取り上げた11名の作曲家のうち現在も存命中なのは3名のみ。武満徹、湯浅譲二、三善晃、そして若くして旅立ってしまった西村朗等、8名の物故された作曲家の力作を取録しているのが、他に類を見ない大きな特徴であり、これら2枚のCDは「レコード芸術」「CDジャーナル」(いずれも現在は廃刊)の専門誌で、特に選曲に対する鑑識眼の鋭さを高く評価された。

今世紀に入ってからピアノ五重奏曲を中心とした室内楽を活動の中核に据えている。ウィハン弦楽四重奏団とは2003年を皮切りに今回が14回目の共演。「ウィハン弦楽四重奏団 with 金澤克史」のコンサートは「ショパン誌」に度々、批評が取り上げられ、それらを要約すると、「共演回数を重ねることによってのみ培われる美しい響きが奏でられ、互いの音楽性を知り尽くした奏者同士の見事なアンサンブルで聴衆を魅了した」というもの。

昨年(2025年)のウィハン弦楽四重奏団結成40周年の記念コンサートでは、メイン演目としてフォーレの第2ピアノ五重奏曲作品115を共演した。「ステージ上手側に椅子を並べる程の満席の聴衆を前に、屈指の難曲で室内楽の最高傑作を、畏敬の念さえこめてしみじみと聴かせる名演を披露した」との評価を得た。今回は第2ヴァイオリンのリボール・カニユカ氏とは初共演となるが、どんな化学反応が起きるか、これまで以上に息の合った「掛け合い」に大きな期待が寄せられている。

1999年度 第5回国際芸術連盟音楽賞受賞。